は凸でも凹でもないが，経済的には，単価がcの品物を容量M，1台当りの使用費用Kのトラックで注文する場合などにあてはまる．一般に，最適在庫政策$Y(x)$は$c(\cdot)$の形に敏感である．たとえば，原点だけで設定費用をもつ注文費用関数に対しては，最適政策は有名な(s, S)政策となる．したがってこのモデルにおいては，(s, S)政策およびバッチ政策の拡張として，パラメータ$s \leqq S, M$で定義されるバッチ(s, S)政策，すなわち，$Y(x)=\min(S,\ x+M\{\frac{s+x}{M}\})\ for\ x<s,\ =x\ for\ x \geqq s$なるものを定義した．そして，このバッチ$(s, S)$政策が最適在庫政策となるために，需要密度関数$\phi(\cdot)$についての条件を与えた．

》国際ニュース《

IIASA：Biomedical Conference に出席して

開　原　成　允

1975年12月8日～12日まで5日間にわたって，モスクワおよびLaxemburgで上記のコンファレンスが開催された．この会議の内容は会議のテーマである「The Development of a Dynamic Model of Health Services and an Information Systems for Cancer Research Co-ordination」に示されているように，医療のマクロモデルおよび癌研究の情報の交流の討議を行なうものであった．しかし，この会議の真の目的は，こうした討議を通じて，IIASA の biomedical project を将来どのように進めていくかについての方向を探ろうというものである．

前半は，モスクワにおいて各国からの発表を行ない，後半は，会議の場所をLaxemburgに移して，IIASA の project としてなにをどのように取り上げるかについて討議した．

以下，筆者の出席した医療モデルの問題にかぎって印象を記す．

出席者は，地元のソ連を除くと36名で，モデルの sessionには約20名が参加した．座長はソ連のV. M. Komorov およびカナダの J. H. MilSum がつとめ，reporter は英国厚生省の A. G. McDonald であった．モスクワにおける各国からの health care model に関する発表は非常に興味深く，それぞれの国によってこの問題に対するアプローチのちがいがよく反映されていた．すなわち，医療のいわゆる「社会化」の進んでいる国においては，医療モデルは，国または地方自治体のレベルで，医療計画の1つの手法として興味をもたれている．これは英国，ソ連などに代表される．一方，医療の世界でも price mechanism が大きく作用している米国では，医療全体のモデルよりは，price mechanism の中での医療の需給を，医療機関単位で分析するためのモデルが多く研究されている．日本はおおざっぱないい方をすれば，その中間にあるといえるかもしれない．

しかし，実際にどれだけモデルが作られ，データが分析されているかというと，この点では，この分野はまだはじまったばかりである．実際にデータが示されたのは，英国，米国，日本の3国が主で，他はまだ研究計画の段階であるような印象を受けた．

後半，場所をSchloss Laxemburgに移して，IIASA の biomedical project の将来の方向が討議されたが，このモデルの問題は非常に関心を寄せられ，ぜひ今後取り上げるべきであるとの結論に達した．特にこの問題は，IIASA の他の project，たとえば，large organization project や ecology などとも関連をもち得る可能性があるので，IIASA としても力を注ぐべきであるという意見が強かった．

最終日に，IIASA Director の DR. Levien に対する Advisory Committee が開かれ，筆者も出席を求められた．ここでは IIASA として health eare model の研究を取り上げたいが，研究員と費用がいちじるしく不足しており，この問題をいかに解決するかが，主として討議された．

研究の実際のスタートには，今後まだ紆余曲折があると思われるが，IIASA ですべての研究を行なうのではなく，IIASA に core member をおき，それが各国の研究者との co-ordination を行なっていくという形態が一番現実的な方法のように思われるという点では意見の一致をみた．

日本においては，これまでこのマクロモデルの問題は，医療情報システム開発センターの中の東大・渥美教授を委員長とする基本問題研究班の中に1つの研究グループを作って行なってきた．今後関心ある人々がさらに増えていくことが望ましいと思われる．

（かいはら・しげこと　東京大学医学部）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．